

愛媛大学文理学部理学科・理学部同窓会

愛媛大学理学同窓会報

第5号

《目 次》

ご挨拶	会長, 前会長…………… 2	東京支部だより…………… 9
最近の愛媛大学, 理学部の動向	理学部長…………… 3	校友会の紹介…………… 11
教室だより…………… 5	会計報告…………… 11	
事務局だより…………… 8	あとがき…………… 12	



就任のあいさつに代えて —余暇活動のすすめ—

会長代行
野 田 善 郎

理学同窓会の皆様には如何お過ごしでしょうか。それぞれの職場で、またご家庭におかれまして、ますますご健勝のことと拝察いたします。この度、10年ぶりに同窓会報を出すことになりました。本年5月の役員会で池田逞会長の後の会長代行を依頼され、会報の挨拶文を書くことになり当惑しているところであります。苦手な挨拶文に代わって、私の体験談を書かせてもらいます。皆様の余暇時間の使い方参考になれば幸いです。

「忙しいから、そんな時間はないわ」と皆さんおっしゃっています。忙しいからこそやりがいがあるのでと私はいます。

プロに就いて、技を盗み、生活に楽しみを加えましょう。近頃はカルチャー教室で、安い月謝でプロの技を教えてもらえるところが増えました。通信教育や本による独習よりはるかに深いところが学べます。おっくうがらずにやってみて下さい。そこで得た知識や経験は、あなたの周りにいる身近な人々と共有することにつながっていきます。絵手紙について学べば、手紙をもらう人が喜びます。身近な人々へのささやかなボランティア活動です。以下、私のボランティア活動を書かせてもらいます。

私は愛媛大学理学部を二度卒業させてもらいました。最初は昭和36年3月文理学部理学科を9期生として。その後、1年間研究生として、電子顕微鏡で研究を続けました。縁あって37年徳島大学に就職しました。昭和43年4月文理学部改組のときに、教養部教官として母校に採用されました。平成16年3月定年退職をむかえ、愛媛大学36期生として無事卒業させてもらいました。

自分の職場を楽しもうというのが、私のモットーです。生協の組織委員になったことが私の職場人生を変えることになりました。

愛大盆踊り大会の実行委員になりました。この大会は今年で35回目を迎えます。実は、徳島大学時代、阿波踊の鳴物教室でおはやしの笛を習いました。プロ連の水玉連から笛方としてスカウトされ、以後30年続けることになります。愛大で盆踊りをしたかったのです。「教職員家族クリスマス子供マンガ映画大会」の映写技師（学生時代に16ミリ映写技師免許取得）を20年以上つとめました。現在は「こども餅つき大会とレクレーション大会」でけん玉指導員として参加しております。これらの大会準備中に知り合った尺八新都山流大師範の医学部H T氏、篆刻家の工学部T M氏に教を乞うことになりました。現在も両氏の指導を受けています。勉強の成果は、県三曲演奏会の出演、教職員作品展、高島屋ふれあいギャラリーへ出品して評価を乞うています。菊づくり、草花栽培法、植木の剪定法は理学部の技官G F氏に教えてもらいました。

私は理学部が好きです。退職した今も、理学部協力者という資格をもらい、園芸部の学生と共にキャンパス内で、草花を植えつけ、環境美化に一役かっています。19年6月から学生アルバイト生の指導を依頼され、理学部内の美化活動にも加わっています。

研究活動には役に立ってはいませんが、環境整備をすることで楽しい理学部づくりに貢献したいと思っています。

楽しめる理学同窓会にしたいものです。



退任あいさつ

前会長
池 田 逞

同窓会員の皆様、ますますご健勝で各地でご活躍

の御事とお慶び申し上げます。平成11年11月11日に

おこなわれました理学部の記念行事の際に会長を仰せ付けられ、今年平成19年5月をもって一身上の都合で次期野田善郎先生にバトンタッチしました。私は会長とは名ばかり、野田先生の研究室が同窓会の事務局でこの同窓会の仕事を二人で細々と引き継ぎ、同窓会の活動は東京支部に頼っていました。

しかし、今年度より野倉嗣紀理学部長さんのご配慮により学部の一部屋が同窓会に使用されるようになり、それにはじめて本部に10名の役員ができ、皆様はりきっておられます。どうかここを核に東京をサテライトに益々発展することをご期待いたします。しかし現実には厳しく活動の中心になる大学卒業後の皆様の御住所を知ること個人情報関係で大変むづかしくなり同窓会名簿すらできなくなっていました。どうかこれからは理学部内に活動連絡拠点ができましたので一層母校とのコミュニケーションをふやして下さい。お願いします。これで私もやっと安心して同窓会を去ることができます。

皆様ご存知のようにわれわれの同窓会名は、正式に「愛媛大学理学同窓会」であります。理学部同窓会ではありません。これは、旧文理学部理学科と新しい理学部との両方の卒業生で構成されているからです。という私は文理学部理学科（物理）の第6回卒業生です。私たちは持田の旧松高の講堂で入学式、卒業式は城北キャンパスの正門近くの当時真新しい記念講堂でした。私たちは3年間は持田の木造校舎で過ごし、最後1年（4回生）を城北で新しく建築した鉄筋三階建て校舎での実験は何か新鮮であった。というのは私は国民学校からそれまで木造校舎以外で学んだことがなかったからです。

私は昨年4月孫の附属小学校入学の機会に、大学時代の大半を過ごした地を50年ぶりに訪ねることができ感慨無量でした。運動場との境にあったケヤキ並木でそよ風をうけて目をつぶれば、半世紀昔の愛媛大学が眼下に浮かびました。先生、校舎の配置、友人との語らいが、次々と思い出されました。私たちの文理学部理学科の同年生は卒業時たった27名でした。物理教室などは、専攻生より先生の人数が多い状況でした。在学時代に二度湯川秀樹博士の特別講義を拝聴したが、一度もお顔をあげずお声が小さかったのでよくわからないとの学生の感想。もちろん声が聞こえても内容を理解できたのは、われらの大先輩物理1回の卒業生で当時助手であった三好昭一先生ぐらいだろうとのうわさでした。三好先生は筑波大学の核融合研究室長もなされ、核融合では世界的に有名でありノーベル賞候補であったが研究に熱中して返事を出さなかった先生です。

私は愛媛県下の公・私立校あわせて45年の教員生活をしましたが、一度も母校に勤務することがなかったもので、大学同窓会長の話が出たとき自分の最後の仕事をここにかけようと決めた。大学が法人化される時、また大学支援組織「校友会」を立ち上げた時にも、われわれ最後のお手伝いをしようと張り切ったが、実際には外部から支援するような事は何もなかった。共に大学の将来に夢をみてがんばった他学部の同窓会長も新しい医学部をのぞき全員会長を去った。国立大学の垢を落とすことはできるのか。しかし、どこかで発想の転換をしなければならないと思うのだが。と気になりつつ去って行きます。長い間お世話になりました。



最近の愛媛大学、理学部の動向

理学部長

野 倉 嗣 紀

理学部同窓会の皆様におかれましてはますますご活躍のこととお慶び申し上げますとともに、日頃からの理学部へのご支援に感謝致します。

前回平成8年に理学部同窓会報を発行してからはほぼ10年になりますが、この間、平成11年には理学部・文理学部50周年を迎え、平成16年には、平成8年から続いていた数理科学科、物質理学科、生物地球科学学科の3学科を平成8年以前の数学科、物理学科、化学科、生物学科、地球科学学科の5学科に戻し、

同時に入試制度、カリキュラム等の大幅な改革を行っています。また、平成16年からは戦後最大の大学改革といわれる国立大学法人化が実施されました。平成18年からは理学部教員と工学部教員が同じ大学院組織、理工学研究科に所属するいわゆる部局化を実施しました。

国立大学法人化後は大学全体の運営方針のもとに各学部の動向・活動が定まることが多々あり、理学部の最近の様子について述べることは大学全体の動

向・活動を述べることにもつながります。理学部に関連した最近の主な出来事を年代順に並べれば、以下のようになり、最近の大学の動きのめまぐるしさが伺われます。

平成11年 沿岸環境科学研究センターの設置
平成13年 地球深部ダイナミクス研究センターの設置
平成15年 無細胞生命化学工学研究センターの設置
平成15年 総合情報メディアセンターの発足
平成16年 理学部の学部改組
平成16年 国立大学法人化
平成17年 スーパーサイエンス特別コースの設置
平成18年 理工学研究科の組織改編（部局化）
平成19年 アジア環境科学コースの設置
平成19年 宇宙進化研究センターの設置（予定）

国立大学の法人化

国立大学の法人化は、よく誤解されるように国立大学が私立大学に変わったということでは有りません。大学運営に必要な経費は今までと変わらずに国から配分されています。国立大学の法人化を一言で言えば、国あるいは文科省の一出先機関から独立した経営体になったということであります。大学は自らの経営方針を社会に対し公表し、多額の税金を使うにふさわしい活動をしていると国民に説明する責任があります。その一つとして、大学は文科省に認可された6年ごとの中期計画・目標を掲げ、それを実施していくことが法令で定められております。

理学部・理学系研究科の教育改革

法人化を機に愛媛大学では大学憲章を定め、「学生中心の大学づくり」を基本目標の一つとして掲げています。理学部でも理学部・理学系研究科憲章を制定すると共に、教育理念・教育目標を公表し、その実現に向け、教育改革を専門に担当する教育コーディネータ制度を他学部にも先駆けて導入し、入試制度の改革、学部・大学院のカリキュラムの整備を行ってきました。また、各講義の学生によるアンケート調査、教員相互の授業参観など各教員の教育に対する意識の共有、教育技術の改善をはかるための取り組みを行うなど、学生の目線にたった様々な改革を実施しています。

研究センター

さて、愛媛大学には他の地方大学にはあまりみられない優れた特色があります。その最たるものに3つの研究センターであります。これらのセンターは理学部、工学部、農学部の教員が中心となって設立

され、世界のトップクラスの研究を展開しています。また、これらのセンターでは研究者養成のためのスーパーサイエンス特別コースが平成17年度から設置されています。

• 沿岸環境科学研究センター

このセンターは国から21世紀の世界をリードする優れた研究プログラムとしてCOE (center of excellent)に四国の大学で唯一選ばれており、また、ポスト COE であるグローバル COE プログラムにも今回採択されています。主に、①環境ホルモン、化学物質による生体に対する影響 ②地球環境変動による沿岸域生態系変動機構の解明などをテーマとし世界をリードする研究拠点となっています。

• 地球深部ダイナミクス研究センター

このセンターでは超高圧実験や物性測定実験、また地震波を用いたトモグラフィ CT や第一原理計算などの手法を用い、固体地球深部の物質構成・構造・運動（ダイナミクス）についても先端的研究を行っています。地球深部科学研究に必要な新しい技術や手法の開発を行うと共に、このような技術を生かした学際的研究も目指しています。世界一堅いダイヤモンドを合成して、新聞などでも紹介されたのでご存じの方もいらっしゃると思います。

• 無細胞生命科学工学研究センター

生命化学の基礎となるヒトゲノムの解読も終わり、ポストゲノムの時代になっています。このセンターでは、世界に先駆けて生命体の素子であるタンパク質を、生体外で自由自在に、かつ大量に合成することが出来る、独創的なタンパク質合成技術確立させています。この世界最先端のタンパク質合成技術を用いて、動植物等あらゆる生命体を構成するタンパク質の物性・機能・構造等を網羅的に解析・研究を行うと共に、新素材の応用研究、また、世界に羽ばたく最先端の研究及び研究者の養成を行っています。



理学部と研究センターが利用している総合研究棟

教室だより

【数学教室】

同窓会の皆様には各分野でご活躍のことと存じます。前回の同窓会報（平成8年12月）からは11年以上たち、その間当数学教室もいろいろな変動がありました。まず、人事についてご報告いたします。

平成11年3月に、木村浩先生が上武大学に、森作常作先生が大阪府立大学に、若木宏文先生が広島大学にと、一度に3人の先生が転出されました。その後任として、石川保志先生、大塚寛先生、平野幹先生が着任されました。また、平成14年3月に山本哲朗先生が定年退官され、愛媛大学名誉教授になりました。山本先生は、その後早稲田大学に着任されました。平成16年4月に方青先生が山形大学に転出され、その後任として安部利之先生が平成16年6月に着任されました。平成18年4月に佐々木洋城先生が信州大学に転出され、その後任として松浦真也先生が平成19年1月に着任されました。さらに、平成19年3月に橋本貴宏先生が気象大学に、平野幹先生が成蹊大学に転出されました。これ以外では、中川祐治先生が総合情報メディアセンターに、庭崎隆先生が共通教育センターに学内で配置換えになっています。このような教員の転出、配置換えに伴い、現在助教2名、教授または准教授1名の公募を行っていて、平成19年10月には2名の新たな助教、平成20年4月には新たな教授または准教授の着任を予定しています。このような多数の人事異動は、数学教室の構成員の研究・教育活動の活発さを表すものでしょう。なお、現在の数学教室の構成員の研究・教育活動の詳細については、教室のホームページをご覧ください。

<http://www.math.sci.ehime-u.ac.jp>

次に、最近の卒業生の就職状況についてご報告致します。ここ数年の景気回復に伴い、数学教室の卒業生の就職状況は良好な状態が続いています。多くの企業の方が、数学科、数理科学科の卒業生の求人に訪れます。それらの方のお話を伺うと、様々な製造業、ソフトウェア産業の基礎としての数学に対する期待の大きさを改めて感じます。また、いわゆる「2007年問題」のせいかと思いますが、教員の需要も多いようで、多くの学生が教員として採用されています。もっとも、この傾向が来年度以降も続くかは良くわかりません。数学科、数理科学科の学生は、伝統的に教員志望が強かったようですが、最近はその

傾向が少し弱くなってきたような印象があります。これも時代の流れでしょうか。また、例年10名以上の学生が、大学院に進学します。愛媛大学理工学研究科にも、10名前後の学生が入学して、さらに進んだ数学を勉強しています。

21世紀のインターネット時代においても、すべての自然科学、社会科学の言語である数学の重要性は、これからもますます高まることと思います。同窓会のみならず、一人でも多くの優秀な若者が本数学教室に進学するよう、ご協力をお願い致します。

末筆ながら、皆様の益々のご健康とご発展をお祈りいたします。
(土屋 記)

【物理学教室】

前回の同窓会報から11年が経ち、大学が大きく変質したことはご存じの通りですが、中でも物理教室は大きく変わった教室の1つです。この間400名を超す卒業生が社会に出て行き、各方面で活躍していますが、最近では情報関係の仕事に就く場合が圧倒的になっています。

物理教室の変化としましては、まず、メンバーが大幅に入れ替わりました。三島、上田、丹下、長谷川、横田、吉井、須川の7先生が定年退職されました。さらに、飯田、川合両先生が個人的な都合で退職されました。替わりに、栗木、瀧崎、柏、谷口、寺島、宗、楠瀬の7先生が新戦力として加入され、物理教室の中軸として大いに活躍されています。

また、研究体制としましては、改組に伴う小講座の解消後はしばらく各先生が「1人1研究室」を原則にして（協力は自由）来ましたが、法人化や少子化への対応の意味もあり、学問の動向や学生の希望などを考慮して、宇宙物理学を教室の柱にすることにし、2名からなる観測チームを2チーム、計4名からなるグループをたてました。このグループはさらに発展し、「宇宙進化研究センター」（10月設立予定）という全学的なセンターの中核になりました。

教育に関しましては、最近の法律の改正で、従来の助手を助教とすることができ、単独で授業を担当することも仕事にすることができるようになりましたが、物理教室では研究体制とも連動して、以前から助手が単独で授業を担当しており（法改正前は「学内講師」）、理学部における助教の扱い方のモデルにもなりました。

カリキュラムにつきましては、学部のカリキュラムが「物理学」のカリキュラムを主とするようになったのはもちろんですが、前号で長谷川先生も触れられていました、大学院前期課程のカリキュラムの構造を大幅に改正し、大学院にも基礎的な科目（例え

ば「力学特論」を導入し、大学院の主要科目にしました。この構造は、部局化された、理工学研究科のカリキュラムにおいても基本的に取り入れられています。

このように物理教室が従来積み重ねてきた「改善」の方向と、現在大学が行っている「改革」の方向が基本的に同じ方向のものが多く、対応には、今のところ、それほど苦労はないように思われます。しかし、変化が大きいため細かな対応には追われています。主な問題としましては、定年退職者の後任の補充には理由が必要で、「講義要員が足りない」というのがほとんどの理由になっていました。法改正前は助手は講義要員にカウントされていませんでしたので、従来は後任の補充は「若返り」の機会でしたが、不十分な若返りしかできず、教室のメンバー構成が望ましい形にはなっていない事ではないでしょうか。いずれ時間が解決してくれることを願っています。

思いつくままに、物理教室の「変遷」を書き下してみました。雰囲気でも感じて頂けたらと思います。(江沢 記)

【化学教室】

卒業生の皆様方には、その後お変わりなくお元気にご活躍のこととお慶び申し上げます。前回の同窓会報（平成8年）以後の化学教室の様子をお知らせいたします。

平成18年度から、組織改革に伴い理学部化学系の大学院における教育は、理工学研究科の博士前期課程では環境機能科学専攻の分子科学コースとして、博士後期課程では環境機能科学専攻の物質機能科学講座および生命物質科学講座として、実施することになりました。また、同じく平成18年度から教員も理工学研究科に所属し、理学部化学科の教育を担当する形になっています。化学教室における教育研究は、各教員の努力でどこにも引けをとらない高い水準を保っていると自負しておりますが、ここ数年間は教員の定年退職が相次ぎますので、この機会に優れた人材を広く求め、教育研究の水準をさらに高める計画です。以下、教室の近況を簡単にまとめてお知らせします。なお、職名は平成19年度から助教授は准教授に、助手は助教に変更されています。

無機化学分野は、平成18年に高橋先生が千葉大学工学部から助教授として着任され、無機多孔性材料の創製の研究を開始されました。北村先生と渡部先生は平成19年に定年退職されました。分析化学分野は、真鍋と島崎先生（平成19年准教授に昇任）がタンパク質集合体の電気泳動と質量分析による解析の

研究を実施しています。構造化学分野は、平成17年に向井先生が定年退職されました。長岡先生（平成13年教授に昇任）と小原先生（平成19年准教授に昇任）が光化学反応などを用いた分子構造と反応の研究を行っています。また、東先生が錯体の構造化学の研究を実施しています。一緒に研究グループを作っておられた四方先生は平成19年に定年退職されました。物理化学の分野では、平成12年に河野先生が定年退職されました。平成12年に竹尾先生が教授として着任され、原子クラスターの化学を研究されましたが、平成18年に定年退職されました。樋高先生（平成12年教授に昇任）、浅田先生（平成9年助教授に昇任、平成16年教授に昇任）はそれぞれ燃焼の速度論的研究と固体表面上の吸着層の研究をされています。有機化学分野は、村嶋先生が平成14年に甲南大学理工学部に移られ、平成15年には小川先生が岡崎国立共同研究機構に移られました。平成14年には奥島先生が助手に着任、平成15年には山田（中島）先生（初の女性化学科教員）が助教授として着任し、小野先生とのグループで光、電子機能性物質の新規合成の研究を行っています。生化学分野は、森田先生が平成13年に総合科学支援センター（農学部）に移られ、同年西山先生が助教授として着任しました。なお、林先生と西山先生は平成15年から無細胞生命科学工学研究センターの所属となりましたが、従来と変わらず化学科の教育に携わられ、遺伝子組み換えを用いて環境耐性を備えた植物の研究を進めています。機器分析センターは組織改革で総合科学支援センターの城北ステーションとなりましたが、引き続き宇野先生（平成15年教授に昇任）が有機合成による新機能物質の創製を、谷先生が導電性物質の合成研究を、倉本先生が海洋生理活性物質の探索とその合成研究を行っています。城北ステーションの先生方も従来通り化学科の教育に携わっておられます。

この間、平成16年に理学部構内（講義棟の東側）に総合研究棟ができ、有機化学分野、生化学分野、分析化学分野の三分野がこの7階と6階に移りました。理学部本館は平成19年3月に全館の改修・耐震工事が終わり、共通教育棟に研究室のあった東先生も本館に移られました。このように、教育研究の施設面の整備が一段落し、新しい教員を迎える体制が整いました。化学教室は伝統である厳しい専門教育を実施し、毎年約45名の学部卒業生と15-20人の博士前期課程修了生、3名前後の博士後期課程修了生あるいは博士（理学）を送り出しています。これらの学生が就職するにあたっては、同窓会の皆様方に有形無形のお力添えをいただいております。教室員一同大変感謝しております。

末筆ながら、皆様方のご健勝と益々のご発展を心からお祈り申し上げます。（真鍋 記）

【生物学教室】

卒業生の皆様、お変わりございませんか。前回の同窓会報の刊行（平成8年度）から11年が経過しました。この間、理学部と生物学教室は大きく様変わりしました。その第一は、理学部キャンパス内の建物が、新築、あるいは改修されたことです。平成15年4月、理学部キャンパスの南東に、7階建ての立派な総合研究棟が完成しました。ここには、主に形態学及び生態学研究室のメンバーが移りました。また、平成15年9月～16年3月、及び平成18年9月～19年3月の二期に分けて、理学部本館の改修が行われました。これに伴い、長い間共通教育棟におられた加納先生、和多田先生が理学部キャンパスへと移られました。広々としたリフレッシュコーナーや、すっかりきれいになったトイレなど、久しぶりに訪れた方はびっくりなさることと思います。

平成9年度以降、数名の先生方が退官・転出され、また新しく赴任されてきました。平成9年4月北海道大学から、河川生態学がご専門の井上幹生先生が着任されました。平成11年3月には、植物形態学研究室の黒木西三先生が停年退官されました。同年4月には、神戸製鋼の総合技術研究所から、微生物進化生態学がご専門の中島敏幸先生が、8月には理化学研究所から、植物生理学がご専門の金田剛史先生が着任されました。一方、平成16年3月には発生学研究室の野田善郎先生が、17年3月には、もと教養で生殖生物学がご専門の日原冬生先生が相次いで停年退官されました。なお、中島の臨海実験所の所長を務められた上田拓史先生は、高知大学へ転出されました。平成18年4月、フランスのIGBMC研究所（ストラスブル）から、脊椎動物の進化形態学がご専門の村上安則先生が、9月には韓国の麗水大学から、魚類の病原微生物と発症のメカニズムがご専門の北村真一先生が着任されました。そしてこの3月には、生理学研究室の城尾昌範先生と遠山鴻先生が同時に退官されました。代わって4月から、植物環境生理学がご専門の佐久間洋先生が東京大学から着任され、また教務職員のポストから高田裕美先生が助教へと昇任されました。以上のように、新しい先生方をお迎えできた一方で、いわば生物学の顔であった先生方が次々と退官され寂しくなりました。とはいえ、野田先生、日原先生、城尾先生、遠山先生には、今でも非常勤講師として、あるいはキャンパスボランティアとしてお越し頂いており、いつも元気な顔を拝見しております。さら

に生物教室教員 OB も含めた“一杯飲み会”には、越智先生、村山先生、水野先生、黒木先生にもご出席頂き、悠々自適の生活のご様子などを伺っております。

ご承知のように、平成8年4月、生物学科は地球科学科と一緒に生物地球圏科学科として再編されました。当時、生物学科の名称がなくなったことに対し、一抹の寂しさを覚えられたことと思います。ところが、新しい理学部の在り方を模索する中で、平成17年度から再び生物学科の名称が復活しました。ちなみにこの4月から、助教授は准教授、助手は助教と呼称が変りましたが、これについては若干の違和感と戸惑いを覚えているスタッフも少なくありません。このような変遷の過程で、カリキュラムも少なからず変わってきました。社会や時代の要請を受けて、新入生セミナーやキャリア教育など、以前は考えられなかったような科目も登場しています。一方、生物学ゼミナールは、必修ではなくなったものの依然として続いており、7月20日の時点で1,319回を数えるに至りました。なおこの度、生物学科のホームページ（<http://www.sci.ehime-u.ac.jp/bio/bioHP/bioindex.html>）を開設致しました。最近の生物学科の雰囲気伝えることができると思います。是非ご高覧ください。

ここ1～2年、好調な企業の業績を背景に就職状況は好転しています。生物学科の卒業生は、多種多様な業種へ就職され、活躍されています。一方、卒業生の約半数は大学院進学です。特に生物学科では、他大学の大学院への進学の割合が高くなっています。生物学科卒業の学生さんが、広く羽ばたかれるのを嬉しく思う反面、当大学の大学院へ進学される方が少なく、複雑な心境です。

スタッフ一同、有為な人材を輩出すべく日々努力しておりますが、いかんせん己が非力と限界を感じているところです。生物学科のさらなる飛躍のために、今後とも同窓生の皆様方の暖かいご支援をお願い致します。最後になりましたが、皆様方のご健勝と益々のご発展を心からお祈り申し上げます。

（小南 記）

【地球科学教室】

卒業生の皆様、ますますご発展のことと推察致します。地球科学教室10年の激動を年代記風に追ってみました。

平成9年4月に井内美郎先生が通産省地質調査所（現、産業技術総合研究所）から教授として赴任され、皆川鉄雄先生が講師に昇任されました。8月に吉岡祥一先生が九州大学理学部助教授に転出されま

した。

平成10年2月に趙大鵬先生が助教授として着任されました。4月に田崎耕一先生が定年退官されました。井内美郎先生が、沿岸環境科学研究センター(以下、沿岸センターと略す)発足に伴い移籍されました。

平成11年7月に奈良正和先生が沿岸センター助手に着任されました。

平成12年4月に小松正幸先生が理学部長から愛媛大学副学長に就任されました。

平成13年3月23日に芸予地震が発生し、大きな被害が出ました。卒業式や謝恩会終了後であり、学生教職員の人的な被害が僅少であったのが不幸中の幸いでした。愛媛大学では、直ちに芸予地震学術調査団(団長鮎川恭三学長、副団長小松正幸副学長)が組織され、地球科学科のスタッフが多く参加しました。学生諸君も災害被害調査に大いに活躍しました。4月に生物学系との複合コースである生態環境科学コースが設置され、教育の多様性が目指されました。また、地球深部ダイナミクス研究センター(以下、ダイナミクスセンターと略す)が設置され、入舩徹男、趙大鵬、田中秀美、井上徹の先生方が移籍されました。7月に田中秀美先生が東京大学理学部講師に転出され、10月に井上徹先生が助教授に昇任されました。

平成14年2月に桃井斉先生が、8月に田崎耕一先生が相次いでご逝去されました。心からご冥福をお祈り申し上げます。この年度から、進級論文を野外系と実験系の二分野で課すことになりました。4月に山崎大輔先生と山田朗先生がダイナミクスセンタ

ー助手に着任されました。

平成15年1月に趙大鵬先生がダイナミクスセンター教授に昇任されました。3月には、小松正幸先生が愛媛大学学長に就任されました。4月には、総合研究棟が新築され、センター所属の先生方と岡本隆先生と掘利栄先生が総合研究棟に引っ越しされました。

平成16年4月に省庁独立行政法人化に伴い、国立大学法人愛媛大学が発足しました。平成17年3月に山崎大輔先生が岡山大学固体地球研究センター助教授に転出されました。4月からは、学部改組により、5学科(数学、物理、化学、生物、地球)へ戻りました。山本明彦先生が北海道大学大学院理学研究科地震火山研究観測センターから教授として赴任されました。榊原正幸先生が教授に、皆川鉄雄先生と掘利栄先生が助教授に昇任されました。5月に土屋卓久先生がダイナミクスセンター助教授、10月に大藤弘明先生がダイナミクスセンター助手に着任されました。

平成18年4月から、部局化に伴い、8名の地球科学科教員は、愛媛大学大学院理工学研究科数理物質科学専攻地球進化学講座に移籍し、教育と研究に、より一層の研鑽に励むことになりました。

平成19年3月に井内美郎先生が早稲田大学へ、趙大鵬先生が東北大学へ転出されました。4月には、我が地球科学科卒業生である西山宣正先生がダイナミクスセンター助教として着任されました。

年代記風に、激動の10年を振り返ってみました。最後に皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。(川寄智佑 記)

事務局だより

愛媛大学理学同窓会は昭和54年に文理学部同窓会から独立して文理学部の理学科と昭和43年に設立された理学部の卒業生・修了生の会で約6,000名の会員を擁する集まりです。活動と致しましては主に、総会・懇親会の開催、会報の発刊、同窓会名簿の出版を行ってまいりました。しかし、ここ10年間、東京支部が毎年支部総会を開催する以外は、活動が停滞していました。愛媛大学の他学部の同窓会と比べても決して活発な同窓会とはいえない状態でした。

そこで、昨年度、活動を活性化するために、池田逞会長の提案で役員会を組織して会の運営を協議することとなりました。役員予定のメンバーは池田会長が各教室(学科)の出身者からそれぞれ2名を委

嘱されました。数学教室は一色準氏(文理13回)、佐伯雅弘氏(理学13回)、物理学教室は池田逞氏(文理6回)、阿部徹氏(理学3回)、化学教室は東長雄氏(文理18回)、谷弘幸氏(理学12回)、生物学教室は野田善郎氏(文理9回)、遠山鴻氏(文理16回)、地球科学教室は千葉昇氏(理学1回)、桑原英了氏(理学5回)です。

第一回役員会を、平成18年12月9日(土)15時から愛大職員会館の(朋友会館)会議室で開催しました。役員会は年末で、しかも急に招集されたので都合のつかない方が半数ありましたが、予定通り開かれました。議題は、(1)理学同窓会の現状報告 (2)今後の活動についてでした。出席者全員から役員就任の承諾をいただき、欠席者は電話連絡で承諾をとり、同窓会新役員が決まりました。会長：池田逞、副会長：野田善郎、一色準、幹事：阿部徹、佐伯雅弘、事務局幹事：東長雄、千葉昇、谷弘幸、監査：遠山鴻、

桑原英了と主な役割を決めました。平成19年1月より、この体制で同窓会を運営することになりました。

平成19年5月18日(金)、理学部本館交流ゼミ室で2回目の役員会を開きました。役員と事務局幹事として新しく委嘱した生物学教室の高田裕美氏(理学16回)および物理学教室の仲田秀雄氏(文理20回)及び、顧問をお願いしている野倉嗣紀理学部長、長谷川広武理学部事務課長にも出席をお願いいたしました。議題は、(1)同窓会室(仮称)の利用について、(2)同窓会の今後の運営について、でした。会議の席で、池田会長が一身上の事情のため会長を辞任して、次期会長に野田善郎副会長を推薦したいとの申し出があり、協議の後に了承されました。なお、池田会長には顧問として指導して頂くことになりました。会則では会長は総会で互選されることになっているので、当分、野田善郎会長代行として同窓会運営にあたることになりました。

以上の2回の役員会および事務局幹事の協議を経て、理学同窓会を活性化するため今後は次のことを改善し運営していきます。

① 総会の開催

理学同窓会の総会は平成11年11月に開催されて以来開かれていません。そこで、総会を来年(平成20年度)開催いたすべく準備をしています。来年度は理学部発足40年の節目の年でもありますし、多数のご参加をお待ちしています。なお、今後、同窓会総会のご案内はホームページでさせていただく予定ですのでよろしくお願いいたします。

② 同窓会報の発行

同窓会報も前号が平成8年に発行されて後、休刊状態にありました。そこで11年ぶりの発刊を目指し本紙の発行にこぎ着けました。今後は、毎年とはいかないまでも、定期的に発行するようにしたいと考えています。

③ ホームページの充実

理学同窓会のホームページは従来からありましたが、作成された時のままで更新等はなされていませんでした。この度、ホームページを一新して今後は定期的に更新します。総会開催などの情報もホーム

ページからお知らせすることになりますので、会員の皆様には時々アクセスをお願いいたします。本紙が皆様に届く頃には新しいホームページが完成している予定です。

理学同窓会ホームページアドレス：

<http://www.sci.ehime-u.ac.jp/bio/rigaku/index.html>

④ 会員の連絡先の把握

事務局で連絡先が把握出来ていない同窓生の方が多くおられます。同窓会報の送付等、連絡が困難になっています。どうかご本人、あるいは友人で本会報が届いていない方は住所を郵便かメールで下記に連絡下さるようお願いいたします。お送りいただいた住所、メールアドレス等は同窓会報等の送付の連絡に使用します。会員名簿等の発行は現時点では考えていません。

住所：〒790-8577 松山市文京町2-5

愛媛大学理学同窓会

メールアドレス：

rigakudousoukai@sci.ehime-u.ac.jp

⑤ 同窓会室の借用

理学部の御協力により、同窓会室を理学部本館一階東側に借用しました。役員会が開けるようテーブルと椅子を用意しました。電話、ファックス、パソコンも設置しました。今後は、ここを拠点に同窓会を運営することになります。しかし、現時点では常駐の人は居りませんので、連絡等は御面倒ですが郵便かメールでお願いいたします。

⑥ その他

同窓生の皆さんがそれぞれの学科で同期会等を多々開催されているとお聞きします。今後はこのような会を開かれたら本部事務局にもご一報下されば幸いです。会報・ホームページ等で報告できたらと考えています。また、会の開催のお知らせ等もホームページの会合日よりにより広報できると思いますので、是非ご利用ください。

以上のように、愛媛大学理学同窓会は生まれ変わろうとしていますので、卒業生の皆様、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

東京支部だより

東京支部の活動から

—2006年度 講演会を開催—

東京支部は毎年、総会・同窓会を開催して来ましたが、2005年から各学科数名からなる運営会議を月一回程度で開催し、出席者が漸減傾向にある総会・

同窓会のあり方を検討してきました。この結果2006年度は、同窓会を盛り上げる新たな試みとして総会と併せて講演会を開催しました。

次ページに、テーマ、講師、内容梗概を報告します。講師をお引き受けいただいた三好先生からは、原爆投下直後の江田島の様子や、湯川秀樹博士や著名な先生方が特別講義で訪問されたという発足初期の文理学部の物理教室のエピソードもご紹介いただ



運営会議メンバー

きました。わが理学同窓会の母体である愛媛大学理学部の歴史の一端にも触れることのできた講演会でした。ご講演後の Q&A の時間には、宇宙論とプラズマとのかかわりまで含めた活発な質問が出され、盛大な拍手の中で成功裏に終了しました。参加者からはこの企画を是非継続してほしいとの要望をいただきました。冒頭に講師の三好先生から、幹事会で発案された講演会の企画が今後の同窓会の発展に役立つことを期待したいとお言葉をいただきましたが、お蔭さまで、2006年度は2005年度に比べ出席会員は14名増となりました。

さて、その後の運営会議では2007年度の総会・同窓会および催しの計画を検討してまいりましたが、2007年度はさらに趣向を凝らし、以下のように講演会と落語をセットにすることにしました。

2007年度 総会・同窓会および催しのご案内

日時：2007年10月14日 午後4時から午後8時

場所：学士会館（東京都千代田区）

予定：1. 講演 暗黒宇宙の謎

大学院理工学研究科

数理物質科学専攻

教授 谷口義明

2. 落語 真打 古今亭菊志ん

教育学部 OB

3. 理学同窓会東京支部総会および懇親会

近日中に会員の皆様には案内を送付いたしますので、多数の方々のご出席をお待ちしております。

東京支部 2006年 講演会報告

テーマ：「エネルギー問題について」

講師：筑波大学名誉教授 三好 昭一先生

（文理学部理学科第一回卒業、愛媛大学助手、理化学研究所を経て、筑波大学教授、同プラズマ研究センター長、東京理

科大学教授を歴任。）

内容梗概

1) エネルギー

世界のエネルギー需給の現状、問題点、将来の見通しについて、最近関心の高まっている地球温暖化問題とも関連づけて紹介された。戦後40年の間に人口は2倍、エネルギー消費量は5倍になっている。残存埋蔵資源量は石油44年、ガス63年、ウラン73年（増殖方式が確立されれば数倍になる）、石炭231年と推定されている。他方で CO₂ 排出による地球温暖化の問題があり、発電の方法による排出量の差異が問題となる。電力1kWhあたりの CO₂ 排出量（Cのグラム数、設備製造にかかる CO₂ も含む）は、化石燃料による火力発電では200-300（CO₂ 回収方式では80）、太陽光や風力発電20-30、原子力6-10、水力5と報告されている。

2) 原子力および核融合

原子力発電の位置づけおよび将来の有様、問題点について紹介された。核分裂炉は、CO₂ 排出量が少ないメリットがあるが、燃料のウランの埋蔵量に限界があることが問題であり、2050年ころに実用化を目指す高速増殖炉の開発が課題となっている。

3) 核融合

一方、核融合は、核分裂と同様のメリットに加え、燃料が重水であるため海水から無尽蔵に採取できるメリットがある。課題は、まだ実現されていない点にあり、2050年を目処とする開発の目標が立てられている現状である。

核融合の実現には、プラズマを高密度で発生させ、1億度という高温で一定時間閉じ込めることが必要である。その閉じ込め方式は、a) 開放端系磁場閉じ込め、b) 環状系磁場閉じ込め、c) 慣性閉じ込めに大別される。近年、ITER と呼ばれる国際共同開発プロジェクトが発足するが、これは、b) の環状系磁場の一種を用いており、トカマク方式と呼ばれる。この装置の建設には1兆5千億円の費用と10年の年月を要する。実用化したとしても世界に数台という規模となるのではないか。一方、a) にはもっと小規模の炉を実現できる可能性



講演会の様子

があり、筑波大学のプロジェクトでは、GAMMA 6 および10と称するミラー型装置で、トカマク方式に遜色のない世界的な記録を樹立している。ミラーの両端から逃げ出すプラズマを閉じ込めるのに工夫をしている。裏話として、この結果を発表後にロシアを訪問した際には、身柄を拘束され、装置の資料

を提供することで開放された。また、1985年には、ノーベル賞委員会から、受賞候補として申請をするように委員全員がサインしたレターを受け取っていたが、プロジェクトで忙しく、返事を出すのを忘れていた。世界的に評価されている証と言えるであろう。

校友会の紹介

愛媛大学校友会は、愛媛大学の目的・使命である教育・研究の進展と地域への貢献を側面から支援し、愛媛大学の発展に寄与するとともに、会員相互の親交を図ることを目的として、平成16年3月に設立されました。

校友会は、同窓会、後援会、退職教員の会及び退職職員会の各会員の皆様、学生並びに現職教職員を会員として、会員同士が母校の愛媛大学を核として人的なネットワークの輪を広げ、様々な支援事業活動を展開しております。

校友会の愛媛大学への支援事業活動は、学生のための、奨学・修学資金援助、海外派遣制度への資金援助、ボランティア活動への支援、学生募集支援事業及び大学図書の整備などを実施しております。さらに、学生の就職活動支援事業として、就職支援バスの資金援助、また、優れた学生及び学生団体に対して支援を行い、大学の活性化に役立てております。

また、平成19年7月に各同窓会東京支部の皆さまのご尽力により、校友会東京支部を設立することができました。今後も、国内の数カ所に校友会支部の設立を展開していく予定です。国外においても、平成18年度から中国、ベトナム、インドネシア、ネパールに支部が設立されるなどその支援の輪は確実に

広がっています。

今年度、愛媛大学は文部科学省が募集した「グローバル COE」(国際的に卓越した教育研究拠点を重点的に支援して、国際競争力のある大学づくりを推進することを目的として、今年度、新たにスタート)の研究拠点として、沿岸環境科学研究センターが、四国では唯一、中四国で鳥取大学と愛媛大学のみ、全国の国公私立でも28大学しか採択されなかった一つとなりました。これは、愛媛大学同窓生にとっても非常に誇れることであります。

また、日経新聞が実施した地域貢献のアンケート調査結果として、その貢献度ベスト10大学が発表されましたが、愛媛大学は10位となるなど、愛媛大学の教育、研究、地域貢献、国際貢献が多方面から高い評価を受けています。

愛媛大学の各同窓会は、その歴史・伝統に基づき色々な形で各学部の発展のため、ひいては愛媛大学の発展のため、ご尽力いただいております。愛媛大学校友会は、その支援の輪を全学的な規模とし、各同窓生のネットワークの強化を通し、愛媛大学のさらなる発展に寄与していきたいと考えております。

つきましては、皆様方の更なるご支援とご協力を頂くとともに、校友会への入会について、ご理解くださいますようお願いいたします。

愛媛大学校友会事務局

理学同窓会会計報告

平成12～18年度 (2000. 4～2007. 3)

収 入		支 出	
平成11年度より繰越	14,258,780	通 信 印 刷 費	461,633
会 費	15,365,000	旅 費	368,000
名 簿 ・ 50 年 誌 代	113,960	名 簿 管 理 費	574,560
利 子	108,280	支 部 会 補 助	918,300
		役 員 会 開 催 費	5,800
		そ の 他	14,444
		雑 費	3,327
収 入 計	29,846,020	支 出 計	2,346,064

平成19年度へ繰越 27,499,956

あ と が き

母校は「国立大学法人愛媛大学」として、平成16年4月、新たにスタートしました。

愛媛大学の支援組織として卒業生、教職員、退職者を取り込んだ形の「校友会」なるものも設立され、活動を始めました。近況報告として、変わってしまった理学部キャンパスの一部を紹介します。

キャンパス東側にあった生物のポンド、数学棟東側にあった物理の液体窒素製造室、須賀先生の部長時につくられたテニスコート、学内各所から集められていた木々から成る雑木林を整地して、「総合研究棟」が平成15年4月に完成しました。この研究棟は鉄筋7階建てで、3階までを沿岸環境科学研究センターと地球深部ダイナミクス研究センターが使用、3階を共同研究スペースとし、5階以上は数学以外の理学部教員の一部が入りました。本館（理学部発足時の建物）の西側半分が平成16年に改修されました。東側半分は平成19年3月に改修されました。改修中は大変でした。未改修の場所で研究活動が続けられました。講義棟では授業も続けられました。騒音とコンクリートの粉じんの中での戦いでした。トイレは数学棟まで歩いてゆかねばなりません。体力をつけるにはいいトレーニングになりました。

(Y N)



改修中の理学部本館

愛媛大学理学部を卒業して早いもので13年が経ってしまいました。今回、愛媛大学理学同窓会東京支部の運営会議メンバーとして若輩者ながら同窓会報の発行という貴重な経験をさせていただきました。

私自身はその後、愛媛大学の博士課程で学位を授与していただいたこともあり、卒業生としての愛媛大学との結びつきはまだ強い方ではないかと思います。大方の卒業生の方々は理学同窓会の活動の実態が全く判らずの状態であったかと思います。

今回、理学部内に理学同窓会室が開設されたことは大変頼もしく、嬉しいことです。東京支部の活動もより活発に展開できるようになっていくと、益々の可能性を感じております。

昨今、地方大学の存在価値というものが議論されていますが、愛媛と東京のコラボレーションによって、愛媛大学の存在を多くの方に認めていただける活動を行っていきたいと思います。これから展開される企画にご期待いただき、多くの卒業生の参加をお待ちしております。ありがとうございました。

(T I)

11年ぶりに同窓会報の発行にこぎつけました。表紙の理学部本館の写真を見て気がつかれたかと思いますが、一部の窓には筋交いが入っています。前会報《4号》の表紙の写真ではありませんでした（前会報は同窓会のホームページから閲覧できます）。これは平成13年3月23日卒業式当日の芸予地震の体験から、耐震性のために改修されました。これも11年間の出来事の一コマです。なお、表紙等の写真は高田裕美氏の撮影です。

今回は会報を発行することを最大の目標にして、東京支部および本部の役員で作業をしまいいりました。次回からはもっと同窓会誌らしく、同窓生の近況や同期会等についても掲載したいと考えています。

(H T)

愛媛大学理学同窓会 会報 第5号

(文理学部同窓会報より通算17号)

平成19年9月 発行

愛媛大学理学同窓会

(文理学部理学科・理学部同窓会)

〒790-8577 松山市文京町2-5

電話・ファックス：089-927-8424

メールアドレス：rigakudousoukai@sci.ehime-u.ac.jp

ホームページアドレス：http://www.sci.ehime-u.ac.jp/bio/rigaku/index.html